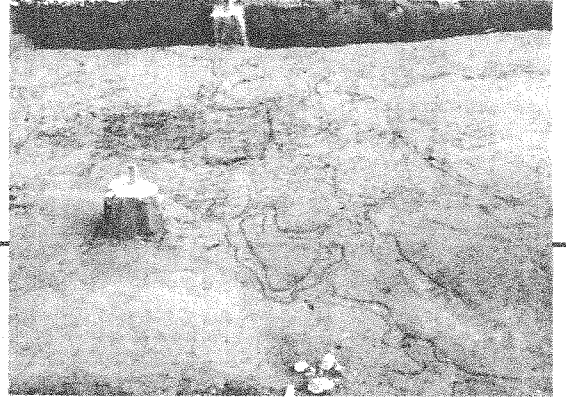


読賣新聞

2012年(平成24年)

3月21日 水曜日

弥生時代の地層面に、液状化でひび割れのように砂が噴き出した痕跡が見つかった部入道遺跡群（白山市教委提供）



1800年前の液状化

石川県白山市の弥生時代後期（約1800年前）の部入道遺跡群に、震度6強クラスの大地震による液状化現象の痕跡があることが、金沢大学の平松良浩准教授（地震学）らの研究で分かった。同遺跡群は2001年に発掘され、東日本大震災後にそれまでの調査データを再検討していた中で見つかった。

竪穴住居跡と同じ地層面に、ひび割れ状に延びる灰色の砂の跡があり、地震の揺れで地盤が液状化し、地下水や地中の砂が噴き出す「噴砂」と確認された。

同遺跡群のある石川県南部には、森本断層と富樫断層の二つの活断層があり、森本断層は約1800年前に地震活動があったことが分かっている。富樫断層の活動は未確認だが、平松准教授は「二つの断層が連動して大きな地震となった可能性がある。両断層の周期は約2000年と考えられており、連動すればマグニチュード7クラスの地震を想定しなければならぬ」と指摘する。

産業技術総合研究所（茨城県つくば市）の寒川旭・招聘研究員（地震考古学）は「人が立ってられないほどの大地震があった証拠。過去の大地震を、自治体の防災対策にも反映させるべきだ」と話している。

石川 震度6強級の噴砂跡